

# 「柏崎の橋」

## 2 番神 いさざ橋（いさざ川橋）

いさざは、柏崎では海辺の旅館が花見帰りの客にいさざ料理を提供したことから有名になったと言われており、4月から5月上旬にかけて鯨波などで漁が行われる。番神にはこのいさざに関連のある「いさざ橋」があった。

いさざ橋はその名のとおりにいさざ川に架かっていた。番神1丁目の旧番神公会堂の脇を通過して柏崎港に流れ込むいさざ川は、昔いさざが捕れたことがその名の由来とされる。「白川風土記」では、この川を「(下宿)村ノ間ヲ流ル 源八天満山ト云フ所ヨリ出ツ 村ノ端ニテ海ヘ入ル 幅六尺許ノ小流ナリ 小魚 色白ク白魚ニ類ス 捕テ食ス佳品ナリ」と記している。



大正後期～昭和初期のいさざ漁の様子  
「(北越名勝) 鯨波鬼穴前いさざ漁」  
当館所蔵 小竹コレクション絵葉書より



現在のいさざ川 番神堂方面は右方向

いさざ橋の名前の由来については「柏崎市伝説集」に次のような説も書かれている。

源義経が弁慶を連れて奥州に下る際、母から「柏崎に入るとき、死出の坂という険しい坂があるから気をつけなさい」と言われていた。しかし、この場所はあまりにたやすい道であった。その時義経が「何といささもない(たやすい)ではないか」と言ったところから、「いささ橋」と呼ばれるようになった。

かつていさざ川には洗い場があり、水道が普及するまでは地元の人で賑ったのであろう。また、古くは旅人や商人などがいさざ橋を渡って柏崎町や鯨波村へと向ったはずである。しかし、いさざ川に向かって大きく窪んでいた地形は人や車が通行しやすいよう平坦になり、普段の生活でこの川や橋を意識することもほとんどなくなってしまった。明治時代に「いさざ川に架せる木橋」と呼ばれた橋の面影は今はなく、その名前が文献に残るのみである。

### ●参考にした本

- 「下宿村誌原稿」関甲子次郎 著 (224 ㌞)
- 「柏崎市伝説集」柏崎市教育委員会 編 (388 K材)
- 「白河風土記」柏崎郷土資料刊行会 発行 (224 ㌞)
- 「わたしたちのまち大洲」私たちの大洲編集委員会 編 (224 ㌞)
- 「子供とつづるふるさと大洲」柏崎市立大洲小学校 編 (224 K材)